

On Multiple Topic Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1988-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4448

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



多重主題構造について

河 野 武

1. 序

初期の機能文法においては、「主題は一つの文において一個のみ存在する」といった提案がなされた。(例えば Kuno (1973) を参照。)しかし現在では、日本語の文においては、一文に複数の主題が現れる可能性があることがわかっている。(北原 (1976) を参照。)例えば次のような例がそれである。

(1) A: きのう彼はどこかに出かけましたか。

B: いいえ、きのうは彼はどこにも出かけませんでした。

「は」は対照を表す場合があるが、(1B) の下線部 T_1 , T_2 に現れた「は」は主題を表している。従って (1B) には主題が二個あることになる。一方、英語の主題は、主題化された要素があればそれが、なければ文の主語がその機能をもつと一般に考えられている。従って、例えば次のような例では、

(2) a. Yesterday, he stayed at home.

b. He stayed at home yesterday.

(3) a. Apple pies he eats every morning.

b. He eats apple pies every morning.

(2a), (3a) においてはそれぞれ yesterday, apple pies が主題, (2b), (3b) においてはともに he が主題であるとされる。このような見方は「主題は一つの文において一つのみ存在する」という主張を反映したものであるが、この主張が正しいか否かは議論の余地がある。英語の場合も、日本語におけるのと同様、(2a), (3a) などの文には主題が複数個 (すなわち主題化された要素と主語) あると考える可能性が残されている。英語には日本語のような主題を明示的に表

す「は」のような標識がないので直接的な証拠は得にくい、英語にも複数個の主題があると仮定すると自然な説明が可能となる現象がある。その第一は主題化された要素と主語との間に見られる一種の共起制限である。第二は主題的副詞を含む疑問文における主題構造である。いま一つは文間の主題の継承の問題である。以下、これらの問題について順に議論してゆきたい。

2. 日本語の多重主題構造について

多重主題構造の性質を検討するにあたって、まず日本語の場合を少し細かく観察してみよう。日本語においては、複数の主題をもつ文の表層形にはいくつかの変種がある。例えば先の (1B) (これを (4a) として反復して示す) と並行して、次の (4b)-(4d) のような形が存在する。

- (4) a. いいえ、 $\frac{\text{き}}{\text{T}_1}$ のうは $\frac{\text{彼}}{\text{T}_2}$ はどこにも出かけませんでした。
 b. いいえ、 $\frac{\text{き}}{\text{T}_1}$ のうは ϕ どこにも出かけませんでした。
 c. いいえ、 ϕ $\frac{\text{彼}}{\text{T}_2}$ はどこにも出かけませんでした。
 d. いいえ、 ϕ ϕ どこにも出かけませんでした。

つまり、二つの主題 T_1, T_2 は、両者とも表出されてもよいし、一方のみ表出されてもよいし、また両者とも削除されてもよい。このことから T_1 と T_2 は主題として全く同等に機能していることが確認できる。

主題はある種の補文にも現れることができ、主文の主題と補文の主題との間に (4) と並行的な関係がみられる。次例を見られたい。

- (5) A: あなたは彼はどう思うと思う？
 B: a. $\frac{\text{私}}{\text{T}_1}$ は $\frac{\text{彼は来ない}}{\text{T}_2}$ と思う。
 b. $\frac{\text{私}}{\text{T}_1}$ は ϕ 来ないと思う。
 c. ϕ $\frac{\text{彼は来ない}}{\text{T}_2}$ と思う。
 d. ϕ ϕ 来ないと思う。

例から明らかなように、主題の実際的な表出は、主文においてであれ補文においてであれ任意である。

複数の主題（当面は二個の主題¹⁾）の間には階層的関係がある。(4), (5) に見

た例について言えば、主文又は同一文の最初に現れた主題 T_1 の方が主主題、 T_2 の方が副主題である。このことは、統語的に主従の関係が明瞭な (5) においては容易に理解されよう。しかし (4) も同様に主題構造に関しては立体的であって、 T_2 は T_1 の題述の中に埋め込まれているのである。従って、(4) について言えば、まず「きのう」という時間枠内で起こった事件についての陳述がなされており、さらに特定の、その事件と関わりをもつ「彼」についての陳述がなされているとみるべきである。

3. 英語の多重主題構造について

英語には複数の主題をもつ文が存在することの形態的・統語的な証拠は直接には得られないが、かりに日本語と並行的に複数の主題をもつと仮定すると自然な説明が可能になる事象が存在する。その第一は主題との間に見られる制約である。Takizawa (1987) によれば、両者の間には次のような条件が課されているという。(なお、ここでの TT (=Topic Topicalization) は狭義の主題化を指すものとして扱われており、左方転位はこれから除外されている。)

(6) The TT condition (in terms of definiteness)

The subject of the sentence must not be more definite than the TT element. (Takizawa (1987: 228))

この条件は次のような事実を説明するものと考えられている。

- (7) a. ?? A certain girl, that man wants to hit.
b. That man, a certain girl wants to hit.
- (8) a. ?? A certain girl, the man wants to hit.
b. ?? The man, a certain girl wants to hit.
- (9) a. The girl, the man wants to hit.
b. The man, the girl wants to hit.
- (10) a. A certain girl, a certain man wants to hit.
b. A certain man, a certain girl wants to hit.

(8a) と (8b) との間に許容度の差がない点（やその他ここでは割愛した細かい事実など）から、(6) の条件が全面的に正しいか否かには問題はあるが、少なくともいわゆる主題と主語の間にある種の共起上の制約があることは事実であろう。これが正しいとすると、なぜ主題と主語の間にこの種の制約が存在するのかが疑問となる。ここで、もしこの種の構文が二個の主題をもつものと考えるならば、とりわけこの種の構文の主語が（副）主題を表すものと考えるならば、この種の制約はきわめて自然なものと解釈される。すなわちこの制約は二つの主題（つまり主主題と副主題）に介在するものと解されるからである。同じ機能をもつ項目間にこの種の共起上の制約があったとしても何ら驚くにあたらない。この事実は、表層主語はいわゆる主題が文頭に存在しない時に限って主題として機能するという規定の仕方が適切なものではなく、表層主語は特殊な事情がない限り常に主題を表すという一般的な規定の方が妥当なものであることを示唆するものである。

さて、今までのところでは、多重主題構造において、主主題が名詞句の場合のみを見てきたが、ここで主主題が副詞類によって形成される場合を検討しておきたい。主主題となる副詞類の第一のグループは、次の例に示すように、時間や場所を表す付加詞である。

- (11) Unfortunately, *in the struggle* the jug of Heather Ale was knocked over.
- (12) *From time to time*, the little man would stop working and take a drink from the jug, using a small wooden ladle.
- (13) But when they died out, their secret died with them. *Now only* the Good Folk know the secret of making Heather Ale.
- (14) *Once upon a time* there was a lazy young Irish lad called Micky.
- (15) *Down below him*, the shepherd could see the lake.
- (16) And *in his mind* the image of that enchanting golden girl haunted every minute of his life.

これらの副詞類に特徴的なのは、先の (7)-(10) と異なり、副主題との間に定

性に関する制約が見られないことである。主主題としてのこれらの付加詞は多かれ少なかれ新情報，すなわち不定性を表しており，定的な副主題に較べて定性の度合は低いが，不自然な発話とはなっていない。これと同様のことは，副詞類の第二のグループである合接詞についても言える。次の代表的な例を観察されたい。

- (17) From time to time, the little man would stop working and take a drink from the jug, using a small wooden ladle. *Then* he would start work again: . . .
- (18) It's a leprechaun! I've heard tell about such Little Folk many times, but this is the first time I've ever seen one! *Now* if I'm clever, I can be a rich man before the day's out.
- (19) Unfortunately, in the struggle the jug of Heather Ale was knocked over. *So* not one drop of the fairy beer did Micky drink.

上のような合接詞を情報上どのように特徴づけるべきかについてはあまり確定的ではない。例えば，*then, now, so* はそれぞれ ‘after that time,’ ‘at this time (in contrast to that time),’ ‘as a result of that’ のようにパラフレーズできることから，指示表現によって表される旧情報を含みつつ全体としては新情報を表す項目，すなわち Prince (1981) の用語で言えば **Brand-New Anchored** を表していると見ることもできる。一方，人間が関わる世界においては，それが現実の世界であれ架空の世界であれ，生起する個々の出来事は自己完結的ではあり得ないことは自明であって，一つの出来事は時間的，因果的に他の出来事と結びつくのは常である。そのように考えると，上のような合接詞の表す内容は情報の送り手と受け手の相方にとって背景的知識となっており，いつでも会話に登場させることのできる情報，すなわち Prince (1981) の言う **New Unused** とみなすこともできる。いずれの見方をとるにせよ，これらの合接詞は大まかな分類では新情報を表しており，出来事の相対的な時間枠を主題として表出している。そしてこの主主題は副主題であるそれぞれの主語よりも定性の

度合いが明らかに低い。

以上、主題化された副詞類は主題化された名詞句と違って、主語との間に定性に関する制約をもたないことを観察した。この事実は、言うまでもなく、副詞類の主題としての資格を危うくするものではなく、単に副詞類と名詞句の主題としての本質的な機能の差を示すものに過ぎない。すなわち、副詞類のうち付加詞は一コマの出来事が生起した特定の時間や場所を表し、合接詞はある出来事の（他の出来事との）相対的時間枠や因果関係を表すのに対して、名詞句は出来事への直接の参加者を表す。図式的に言えば、副詞類は出来事の外枠を形成し、名詞句は出来事の内側の一部を構成するものである。このように、副詞類と名詞句は本質的に異質なものとみなし得るから、副詞類が主主題としてふるまう時には副主題である主語名詞句との間には特別な共起制限はないのである。他方、名詞句が主主題となる場合には、同質的な副主題である主語名詞句との間に相剋が生ずることになる。

英語において多重主題構造の存在を示唆する第二の事実として、Kuno (1975) によって提出された次のような疑問文の解釈と関連した現象を挙げることができる。

- (20) a. Was John born in New York in 1950?
- b. Was John still a small baby in 1950?

Kuno (1975: 168–169) は、中立的な疑問文の抑揚のもとでは、(20a) は 1950 についての問いであるのに対し、(20b) は still a small baby についての問いであることから、(20b) の in 1950 は主題的副詞 (thematic adverb) であり、(20a) の in 1950 は非主題的副詞 (non-thematic adverb) であるとした。従って、(20b) の主題は、(文頭に位置する副詞ではないが) in 1950 であることになる。ここまではよい。さて、残念ながら、Kuno は (20a) の主題が何であるかについては明らかにしていないが、(20a) の通常の読みでは

- (21) As for John, is it the case that he was born in New York in 1950?

のような主題構造と対応づけることが可能であることからみて、(20a) の主題は主語の John であるとするのが妥当であろう。²⁾ (この線に沿った疑問文の主題の規定の仕方については Lyons (1977: 501) を参照されたい。) このような主題の規定の仕方が当を得たものであるとするならば、(20b) についても並行的な主題構造が想定できるはずである。事実、(20b) は通常の読みでは

(22) As for John, is it the case that in 1950 he was still a small baby?

と同義であり、主語の John は主題を成すとみなし得る。一方、既に述べたように、(20b) においては副詞の in 1950 が主題に認定されているのであるから、この文は結局二個の主題によって構成されていることになる。

複数の主題の共存をうかがわせる第三の事実として、文間における主題の継承にかかわる問題がある。一般に、結束性の高い文間においては主題が明確な形で継承される。手始めに、結束性が最も高いと考えられる疑問文とその答えの例を見てみよう。

(23) A: What will you do this afternoon?

B: a. I'll clean my room this afternoon.

b. This afternoon, I'll clean my room.

一般的な主題の規定の仕方に従えば、主題は (23A) では what, (23Ba) では I, (23Bb) では this afternoon となろう。このような規定では上のような疑問文と答えとの間に主題が何らかの形で継承されていると述べることはできない。しかしながら、本稿の立場のように、主語は特別な場合を除き常に主題を表すものとみなすならば、事実はかなり違った様相を帯びてくる。まず、既にみた (20) と同様に、疑問文の主語は主題を表すとみなすならば、(23A) では you が主題となる。そうすると、(23Ba) においては、先行文の主題の you が話し手の交替に伴って I として継承されていると記述することができる。一方 (23Bb) は、this afternoon を主主題、I を副主題にとる多重主題構造を成しているものと考えらるならば、ここでも先行文の主題は副主題としてではあるが、

依然として継承されていると述べることができる。このように、多重主題構造を仮定することによって、談話における主題の継承の様態を正しく認識することが可能となる。

談話における主題の継承の実際についてさらに詳しく観察するために、もう少し長い談話を取り上げておこう。

- (24) . . . Beside him stood a large jug. From time to time, the little man would stop working and taking a drink from the jug, using a small wooden ladle. Then he would start work again: “Tap-tap! Tap-tap! Tap-tap!” went his little hammer. He was as busy as a bee.

一見して明らかのように、この談話断片における中心的な項目は、him = the little man = he = his = he で表される生きもの、すなわちある妖精である。この項目は、ある時には主題化副詞（の一部）として、またある時には文の主語（の一部）として現れている。我々がこの項目を中心的なものと解するのは、ただ単にこの項目が繰り返し談話の中に現れるからではなく、潜在的に中心的な項目が通常収まる位置、すなわち主題の位置に繰り返し現れるからであろう。上の例の第二番目の文および第三番目の文を主主題＋副主題の構造を成するものとみなすならば、主題の継承は見かけよりももっと徹底したものであることを明らかにすることができる。これを、伝統的な見解に従って、文頭の副詞である from time to time 及び then のみを主題として認定するのでは適切とは言えないであろう。

このような多重主題構造論を支持すると思われる興味深い例として、新聞などにおける死亡記事がある。死亡記事とは、言うまでもなく、ある社会的な重要人物の一生における偉業を伝える談話である。この種の談話は、ある特定の人物についての談話である限り、この人物を指示する語句を無標の主題に選び、例えば次のように記述することができる。

(25) Mr Mitsujiro Ishii

Mr Mitsujiro Ishii, who as a former speaker of the Japanese House of Representatives was instrumental in staging the 1964 Tokyo Summer Olympics and the 1972 Sapporo Winter Olympics, died on September 20. *He* was 92. *Ishii* had served as Industry and Commerce Minister and in other cabinet posts under the late Prime Ministers . . .

(Brown and Yule (1983: 136))

また、問題の人物の生涯の一時点を主題に選んで記述することも可能である。次の例を見られたい。

(26) Mr William Serby

Mr William Serby who died aged 85 on September 20 was County Treasurer to Buckinghamshire County Council from 1929 to 1961.

He was commissioned in the Queen's (R.W. Surrey Regiment) in 1915 and served in France until he was wounded in 1916. *From 1917 to 1919* he served as liaison officer with the French and Russian forces in the North Russian Expeditionary Force.

In 1926 he was appointed County Accountant to the Cornwall C.C.

During the Second World war he commanded the Home Guard in Wendover . . .

(Brown and Yule (1983: 138))

しかしながら、このことをもって、William Serby なる人物の生涯の一時点の集合がこの談話の中心的項目であるとすることはできないであろう。中心的項目は William Serby でなくてはならないであろう。このことは上の談話中一貫して William Serby=he が主語、すなわち主題の位置を占めていることによって保障されているのである。上の斜字体で示した主題化副詞は出来事の時間軸を設定しているが、これらの主題化副詞の存在によっても、主語の主題性はいささかの影響をも受けないと言ってよい。主語は出来事への直接の参加者の中から中心的な事物を選び出して、それを主題化し続けるのである。

さてここで、今までの考察では保留にしてきた問題である、主題を表さない主語について検討しておかなければならない。この種の有標の主題構造が生ずるのは主語が新情報を表す場合である。新情報の主語をもつ文においては、まず第一に、その文に旧情報を表す項目が含まれていればそれが主題となる。次のような例がそれを示す。

- (27) A: I'm going to Sheffield tomorrow.
B: Really? My mother came from Sheffield.

上の例における主語 **my mother** は前の文から継承されている項目である **Sheffield** についての題述の一部を成している。(河野 (1987: 59-60) を参照。) 新情報の主語をもつ文においては、第二に、既に主主題が得られていればそれが当該の文の全体的な主題となり、主語はその題述の一部となる。次例を観察されたい。

- (28) **Beside him** was a large jug.

上の例において、主題である **beside him** は既知の項目 **him** を含む **Brand-New Anchored** であり、先行談話と結びつきやすい形をとっている。これとは対照的に、主語の **a large jug** は倒置によって本来置かれるべき位置から後方に移動されており、題述として認定されやすい形式になっている。³⁾

(28) の場合と並んで、主題を表さない主語が倒置されず、本来の主語の位置に留まっている次のような形がある。

- (29) **Once upon a time, long, long ago, in a remote mountain region of Wales, a poor young shepherd** was watching his flock.

この例は民話の冒頭から拾ったものであるが、時間を表す副詞類が二個、場所を表す副詞類が一個主題として現れているのが注意を引く。主語を含めて残りの部分はこれらの主題に対する題述を構成している。このような、主題を表さない主語は、次のように **there** 挿入によって (29) と並行的に題述としてより

ふさわしい場所に移動することもできる。

- (30) Once upon a time, long, long ago, in a remote mountain region of Wales, there was a poor young shepherd watching his flock.

以上、新情報を表す主語が主題を表さず、むしろ題述（の一部）を表すことを見てきた。しかし、新情報の主語は常に主題を表さないというわけではない。それが主題を表さなかったのは、他に主題となるにふさわしい項目が存在したり、既に（主）主題が得られていたりしたからであって、もしそのような条件が整わなければ新情報の主語も主題を表す。次例がその具体例である。

- (31) A: . . . I mean I told Kit to sell out—sell her shares.

B: [m]

C: Yes, but *nobody* would buy them.

- (32) *That wretched Dick Stone* said, “Oh, how splendid!”

上の (31) の *nobody* は Brand-New Unanchored であり、(32) の主語は New Unused である。

4. 結 論

以上、日本語のみならず、英語においても多重主題構造を仮定すべき統語的、意味的、談話的事実があることを述べた。英語に多重主題構造を認めることによって、主語は見かけよりもはるかに徹底して主題を表している実態が明らかになった。既に触れた特別な場合を除いて、英語の主語は常に主題を表しているのである。また、多重主題構造を仮定することによって、概略、主主題は出来事の外枠を形成する時間や場所の副詞類によって占められ、副主題は出来事に直接参与する事物の中の中心的なもの（すなわち主語名詞句）によって占められる、という図式が得られることになった。本論の主張が正しいとすると、英語は日本語と並行的な主題構造を規定できることになり、このことは言語的普遍性の観点から言っても歓迎すべきことである。しかし言語的普遍性に実質

を与えるためには、主主題、副主題の相方についてさらに洞察を深めなければならない。

注

- 1) 一文について何個までの主題が許されるかを断定するのはむずかしいが、補文構造においては三個以上主題が出現すると許容度が著しく落ちるという事実がある。次例はその具体例である。

(i)?? 妻は私は彼は来ないと思っていると信じている。

$\text{T}_1 \quad \text{T}_2 \quad \text{T}_3$

(ii)?? 娘は妻は私は彼は来ないと思っていると信じていると言っている。

$\text{T}_1 \quad \text{T}_2 \quad \text{T}_3 \quad \text{T}_4$

上の例の許容度の低さは自己埋め込み構造であることも多いに与っているが、主題の個数も関っていることは次のような例も依然として許容度が低いことによって理解できる。

(i)?? 私は彼は来ないと思っていると妻は信じている。

$\text{T}_2 \quad \text{T}_3$

T_1

- 2) Halliday (1967, 1985) の Theme の概念は本稿の主題の概念とは根本的には異なるが³, Halliday (1985: 48) では yes/no 疑問文の Theme は(文頭の)「定形動詞」(つまり助動詞)と主語の二つから成るとされているのは注目に値する。(ちなみに Halliday (1967: 212) では「定形動詞」のみを yes/no 疑問文の Theme とみなしている。)
- 3) 倒置には、これとは別に、焦点の前置 (focus fronting) によるものがある。次例を見られたい。

(i) "Tap-tap! Tap-tap! Tap-tap!" went his little hammer.

(ii) "Thank you for your blessing," said the leprechaun.

(iii) So not one drop of the fairy beer did Micky drink.

(iv) Away trotted the little man, with Micky following behind in great excitement.

ここで前置されているのは (i) では様態の擬声的表現, (ii) では直接引用, (iii) では否定辞を伴う名詞句, (iv) では方向を表す副詞であり, これらはすべて新情報を表している。一方、倒置によって後方に追いやられたそれぞれの文の主語はすべて照応形をとっており、旧情報を表している。従ってこれらの例においては、原則どおり、主語が主題を、前置された構成素を含めて述語全体が題述を表している。ただ、ここでは焦点にあたる項目が鮮明な形で前景に引き出されており、それと引き換えに主題が後景に退けられている。(この種の倒置は、ある場合には、文章の緊張感を完結させる働きをもつ。(Green (1980: 594-599) を参照。))

参 考 文 献

- Brown, G. and G. Yule. (1983) *Discourse Analysis*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 福地 肇 (1985) 『談話の構造』新英文法選書 10, 大修館書店。
- Green, G. (1980) "Some Wherefores of English Inversion," *Lg.* 56. 3, 582-601.
- Halliday, M.A.K. (1967) "Notes on Transitivity and Theme in English, Part 2," *JL* 3.2, 199-244.

- . (1985) *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold, London.
- 北原保雄 (1976) 「文の構造」『文法 I』岩波講座日本語 6, 岩波書店。
- 河野 武 (1987) 「英語イントネーションの談話機能について」『大妻女子大学文学部紀要 19』, 51-62.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
- . (1975) “Conditions for Verb Phrase Deletion,” *FL* 13, 161-175.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*, Vol. 2, Cambridge University Press, Cambridge.
- Prince, E.F. (1981) “Toward a Taxonomy of Given-New Information,” in P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*, Academic Press, New York, 223-255.
- Takizawa, N. (1987) “A Functional Analysis of Topicalized Sentences in English,” *English Linguistics* 4, 221-237.